

芥川竜之介 『西方の人』注解 (五)

R. Akutagawa's "SAIHO NO HITO" EXPLANATORY Notes (V)

吉田 孝次郎
中野 恵海

27 イエルサレムへ

クリストは一代の予言者になつた。同時に又彼自身の中の予言者は、
——或は彼を生んだ聖霊はおのづから彼を翻弄し出した。我々は蠟燭
の火に焼かれる蛾の中にも彼を感じるであらう。蛾は唯蛾の一匹に生
まれた為に蠟燭の火に焼かれるのである。クリストも亦蛾と変ること
はない。②シヨウは十字架に懸けられる為にイエルサレムへ行つたクリ
ストに雷に似た冷笑を与へてゐる。しかしクリストはイエルサレム
へ驢馬を馱つてはひる前に彼の十字架を背負つてゐた。それは彼には
どうすることも出来ない運命に近いものだったのであらう。彼はそこ
でも天才だつたと共にやはり畢に「人の子」だつた。のみならずこの
事實は数世紀を重ねた「メシア」④と云ふ言葉のクリストを支配してゐ
たことを教へてゐる。樹の枝を敷いた道の上に「ホザナよ、ホザナ

よ」の声に打たれながら、驢馬を走らせて行つたクリストは彼自身だ
つたと共にあらゆるイスラエルの予言者たちだつた。彼の後に生まれ
たクリストの一人は遠いロオマの道の上に再生したクリストに「どこ
へ行く？」と詰られたことを伝へてゐる。クリストも亦イエルサレム
へ行かなかつたとすれば、やはり誰か予言者たちの一人に「どこへ行
く？」と詰られたことであらう。

(注)

①彼を生んだ聖霊……本篇「2、マリア」及び「3、聖霊」参照。

②シヨウは十字架に……Bernard Shaw (1856~1950) イギリスの劇
作家、批評家。現実主義的で既成秩序や因習に強く反発し
た。クリストへの冷笑云々の作品は「バック・ツウ・メスウズラ」

(Book to mehusehlah)

③驢馬を馱つて……予言者は驢馬に乗って現われるという言い伝えが

あった。

④「メシア」messiah (英語) もとはヘブライ語で「聖油をそそがれた者」の意。古代ユダヤ人が待ち望んだ救世主。ギリシヤ語訳は Christos でキリストという名はこれに由来し、キリスト教ではイエスが救世主たることを表わす尊稱となった。

⑤「ホザナよ……」hosanna (英語) 救い給へ 吾等は祈り奉る、の意。マタイ伝、第二十一章・九「前にゆき後に従ふ人々呼びひけるはダビデの裔ホザナよ主の名に託て来る者は福なり至上處にホザナよ」とある。

⑥彼の後に生まれたキリストの一人
キリスト十二使徒中最も有力な一人でペテロ Petros を指す。キリストの死後迫害に耐えず、ローマを去ろうとする途上、キリストの幻影に会い、再びローマに引き返したという伝説がある。

⑦「どこへ行く？」 Quo Vadis ? (ラテン語) ポーランドの作家シエンキェビッチ (Henry Sienkiewicz 1846~1916) の歴史小説にこの題名の小説があり、彼は、ネロのキリスト教徒弾圧の史実に照らし、迫害される自国民族の命運を暗に託そうとした。ノーベル賞受賞作。

(解)

キリストは当時最高の予言者になった。それと同時に彼自身の中の予言性は、——あるいは彼が父からうけついで聖靈性は自動的に働きだして彼をもてあそび出した。我々は「自分からとび込んで」蠟燭の

火に焼かれる蛾の中にも「自身の中の前記の質に支配される」キリストを感じるであろう。「すなわち」蛾はただ一匹の蛾に生まれた「だけ」のために「蛾というものの性質で」蠟燭の火に焼かれるのである。キリストもまた「持って生まれた性質に支配されている点で」蛾と同じである。「それを考えずに」シヨウは「わざわざ」十字架に懸けられるためにイエルサレムへ行ったキリストに対してひどく冷笑している。しかし「それは酷な批判で」、キリストはイエルサレムへ驢馬に乗って入る(救世主は驢馬に乗って現われるとの伝えあり)前に「すでに性格的に」彼は十字架をになつていた。それは彼にはどうすることもできない運命に近いものだったのであろう。彼はそこ(自分の運命に従った点)でも、予知しつつ死地に赴く天才だったと共にやはり、運命に支配される「人の子」だった(「神の子」の否定)。それのみならずこの「上記の天才だったという」事実で数世紀このかた待望されて来た「メシア」という言葉がキリストを支配していたことが知られる(もしそうでなかったなら、「メシア」の言葉に動かされなかつたとも考えられるが)。「すなわち」樹の枝を敷いた道の上を「ホザナよ、ホザナよ」の「期待の」声にしめつけられながら、驢馬を走らせていったキリストは彼自身だったとともに又あらゆるイスラエルの予言者たち(「の天才性」の姿だった。彼の後に生まれたキリスト「的天才」の一人ペテロは「イエルサレムには」遠いローマ「で、迫害にたえかねての脱出」の途上に再生(復活)したキリストから「(一体)どこへ行く?」となじられたということである。キリストもまた「自己の中の聖靈の声にそむいて」イエルサレムに行かなか

ったとしたら、やはり予言者の誰かから「どこへ行く？」となじられたことであろう。

(要旨)

天才にとって、その天才の發揮は同時に運命的な意味をもってその人生を狂わすものである。たといその為には破滅に到ろうともそれから離れたり引き返したりすることは出来ない。ただもう前進あるのみであつて、結果の成否を打算して己が行動を左右することは出来ないものなのである。それが聖靈の子たる所以であり、天才の天才たる所以であり、彼らの性格乃至運命なのである。もしも周囲の事情や自分の都合のためにその道を棄てようとする心が生じても、彼の中の天才は先達の声によって天才の道に自分をのせることになるというのである。先達・天才のその声を聞き取り本来の自己(天才)に立ち帰らせずにはおかないものが、天才に生れたものの性質で、あり、聖靈の血をうけたためであることを、芥川が火中に自らを焼く蛾を引き合いに出して力説するところに此の章の主眼があり、その立場から、クリストのイエルサレム行きを冷笑したショウに対して、彼こそ天才のいかなるものかを解せざるものではないかとの冷笑を押さえている気配がそこに感じられる。芥川はすでに「運命は性格の中にある」という言葉を肯定していた。「(「侏儒の言葉」の中の「運命」)「君は僕の言葉を信用することは出来ないであらう」と思ひながらも「唯ぼんやりとした不安」(「いずれも遺書」或旧友へ送る手記)のためにあえて自らを滅せずにはいられない彼は、季節柄、灯火を慕いだした蛾の上

に、生得のもの恐しい力(Daemon)を深く観じたるうこと、そしてあえて死地に赴く聖靈の子「わたしのクリスト」(第一章)への感銘と理解を、ショウの冷笑を引き合いにして記さずにはいられなかつたであろうことが思いやられる。

28 イエルサレム

クリストはイエルサレムへはひつた後、彼の最後の戦ひをした。それは水々しさを敏いてゐたものの、何か烈しさに満ちたものである。彼は道ばひの無花果を呪つた。しかもそれは無花果の彼の予期を裏切つて一つも実をつけていない為だつた。あらゆるものを慈んだ彼もここで半ばヒステリックに彼の破壊力を揮つてゐる。

②「カイゼルのものはカイゼルに返せ。」

それはもう情熱に燃えた青年クリストの言葉ではない。彼に復讐し出した人生に対する(彼は勿論人生よりも天国を重んじた詩人だつた。)老成人クリストの言葉である。そこに潜んでゐるものは必ずしも彼の世間智ばかりではない。彼はモオゼの昔以来、少しも変らない人間愚に愛想を尽かしてゐたことであらう。が、彼の苛立しさは彼にエホバの殿に入りてその中にをる売買する者を殿より逐出し、兎銀者の案、鴿を売者の椅子を倒させてゐる。

④「この殿も今に壊れてしまふぞ。」

⑤或女人はかう云ふ彼の為には彼の額へ香油を注いだりした。クリスト

は彼の弟子たちにこの女人を咎めないことを命じた。それから——十字架と向かひ合つたクリストの気もちは彼を理解しない彼等に対する、優しい言葉の中に忍びこんでゐる。彼は香油を匂はせたまま、(それは土埃りにまみれ勝ちな彼には珍らしい出来事の一つに違ひなかつた。) 静かに彼等に話しかけた。

「この女人はわたしを葬るためにわたしに香油を注いだのだ。わたしはいつもお前たちと一しよにゐることの出来るものではない。」

⑥ ゲッセマネの橄欖はゴルゴタの十字架よりも悲壯である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、——彼自身の中の精霊とも戦はうとした。ゴルゴタの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。彼はこの事実を知り悉してゐた。が、彼の弟子たちは——ペテロさへ彼の心もちを理解することは出来なかつた。クリストの祈りは今日でも我々に迫る力を持つてゐる。——

⑧ 「わが父よ、若し出来るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。」

あらゆるクリストは人気のない夜中に必ずかう祈つてゐる。同時に又あらゆるクリストの弟子たちは「いなく憂て死ぬばかり」な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてゐる。……

(注)
① 道ばたの「道ばひ」は「道ばた」の誤り。

「マタイ伝」第二十一章・十八—十九に「翌あさ都城へ返るとき飢

ければ路の旁にある一の無花果の樹を見て其処に來りしに葉の他に何も見ざりしかば今よりのち永久も果を結ぶことを得ざれと之に曰たまひければ無花果立刻に枯ぬ」とある。

② 「カイゼルのものは……」マタイ伝第二十二章十五—二十二。「……イエス彼等に曰けるは然ばカイザルの物はカイザルに歸しまた神の物は神に歸すべし彼等之をきき奇としてイエスを去ゆけり」パリサイ人たちがイエスをわなにかけようと納税の可否を質問したところ貨幣にカイゼルの肖像と記号があるのを見てカイゼルに返せ、そして神の物は神に納めよと巧妙に答えられてひきさがつた。

③ 「殿に入りて……」マタイ伝第二十一章十二。

④ 「この殿も今に……」この言葉は聖書には見当らない。

⑤ 或女人は……。マタイ伝第二十六章・六—十三「……ある婦人石の器物に価たかき香膏を盛てイエスの食する所に携來り其首に斟しかば……貧者は常に爾曹と偕にあれど我は常に爾曹と偕に在らず彼がこの香膏を我体に斟しは我の葬の為に行る也……」

⑥ ゲッセマネの橄欖 Gethsemane エルサレム近郊の地。イエスが処刑の前日、その橄欖園に赴いて祈禱したと伝える。

⑦ ゴルゴタ Golgotha エルサレム近郊にある丘。イエスが磔の刑に処せられた地。マタイ伝・第三十七章

⑧ 「わが父よ……」マタイ伝第二十六章・三十九—四十二「……吾父よ若かなはゞ此杯を我より離ち給え然ど我心の従を成んとするに非ず聖書に任せ給へ……我父よ若われに此杯を飢さで離つこと能はずば聖旨に任せ給へ」

⑨「いたく憂て死ぬばかり」マタイ伝第二十六章三十六—三十八。「(イエス)ペトロ及びゼベダイの二人の子を携へ憂へ哀みを催し彼等に曰けるは我心いたく憂て死るばかり也……」

(解)

クリストは「そこが自分の処刑の地となることを知りつつ」イエルサレムへ入った後「自他に対して」最後の戦いをした。その戦いぶりとは若々しさを失なっていたけれども、何となく烈しさに満ちたものである。「まず」彼は道ばたの無花果を呪った。しかも「意外にも」それは「空腹の」彼の期待にそむいて一つも実をつけていないためだった。「それまで」あらゆるものに慈愛をかけて来た彼であるのにここでは半ばヒステリックに「その無花果を呪い枯らすという」破壊力を發揮している。

「カイゼルのもものはカイゼルに、「神のもものは神に」返せ」

「パリサイ人たちがクリストをわなにかけようと、納税の可否を質問したところ、こうソツなく答えられ、驚歎して引きさがつたという。」

これはもう情熱に燃えた青年クリストの言葉ではない。「彼が輕蔑していたこの世の人生が」彼に仕返しはじめたのに對する(彼ももちろん人生よりも天国を重んじた詩人だった。)分別じみたクリストの言葉である。この言葉に潜んでいるのは必ずしも彼の世渡りの才だけではない。「何百年も前の」モオゼの昔から少しも変わらない人間の愚かしさに愛想をつかしていた「その気持も窺められていた」ことで

あろう。が、そのいらだたしさはエホバの「殿に入りてその中なる凡ての売買する者を逐出し兎銀者の案、鴿をうる者の椅子」を倒した行動と、「この殿も今に壊れてしまふぞ」という叫びとなって現われている。

ある女人はこういう「いたわしい状態にある」彼のために彼の額へ「高価な」香油を注いだりし「て彼につくし」た。クリストは弟子たちが「その代金で貧しい人たちが救えるといつて」彼女をとがめるのを制止した。「上記の言動にこめられたクリストの気持は」それから——十字架と向い合った(死刑に直面した)クリストの気持は彼を理解しない弟子たちに対する「つぎの」優しい言葉の中に忍びこんでいる。「すなわち」彼は香油を匂わせたまま、(こんなことは「常に」土埃にまみれ勝ちな彼には珍らしい出来事の一つに違いなかった。)静かに彼らに「こう」話しかけた。「この女人はわたしを葬送するためにわたしに香油を注いだのだ。わたしはいつもおまえたちといっしょにしていることの出来るものではない。」

ゲッセマネのオリブ山におけるクリストはゴルゴダ(刑場)の十字架(上のクリスト)よりも悲壯である。クリストは死力を揮いながら、そこ「(のオリブ山)」で彼自身とも——彼自身の中の聖靈「(の子たる質)」とも戦おうとした。ゴルゴダの十字架「(による死)」は彼の上に刻々と迫ろうとしている。彼はこの事実を知りつくしていた。が、彼の弟子たちは、——「彼をクリストといひ現わした」ペテロ(マタイ伝第十六章—十七章)さえ彼の心持を理解することは出来なかつた。クリストの祈り「(にうかがえる彼の心もち)」は今日でも我々にひしひ

しと迫る力を持っている。

「わが父〔聖靈〕よ、もしできるものならば、この杯〔親子の誓いの固めの意〕をわたしからお離し下さい。けれども、〔もう〕しかたはないとおっしゃるならば、どうか御心のままになすつ下さい。」
 あらゆるクリストは〔聖靈の子たるゆえに破壊に直面して〕人の寝静まった夜中に必ずこう祈っている。同時にまたあらゆるクリストの弟子たちは「いたく憂えて死ぬばかり」な彼の必もちを理解せずにオリープの下に〔すやすやと〕眠っている〔ばかりな〕のである。……

（要旨）

死地イエルサレムにおけるクリスト最後の戦いぶりを叙して、その内面の考察に及んでいる。その戦いぶりは、これまでと趣を異にして、若々しさに欠けているが、何か烈しさに満ちたものだと総括に始まり、話柄を聖書の順によらないでその視点を外から内に移しているようである。世の一切を愛して来たクリストではあったが、自分の予期に反した無花果には、これを呪い枯すという破壊的行動をとっている彼は、自分に対する復讐的畏のために用心深くソツのない老成ぶりを身につけざるを得なかったが、それだけに、少しも改まらない人間愚に愛想がつき、一面では焦らだたしさのあまり、エホバの神殿を生活の場に行っている人々を追い出し怒号するすさまじさを示したのである。

クリストは十字架の死を間近かにひかえたその別れの気持を、彼の額に香油をそいだ女人にことよせて、弟子たちにやさしくほめか

しているが、彼らはその場にならなければ理解できる彼等ではなかったのだ。

弟子たちの中にさえ一人の理解者も持たないクリストの心中は、十字架上の苦しみよりも悲壮なものであった。死が刻々に迫まるのを知りつくしていた彼は必死になって彼自身の中にある、父からうけついで聖靈（自身をいやおうなく死地に赴かせるもの）とも戦おうとさえしたのだ。父に解放を願わずにはいられなくなった彼の切ない祈りは、あらゆるクリストたちが分かちもつものであり、又あらゆるクリストたちの師の、死ぬほどの切ないその心もちを理解せずに安閑と眠っているものなのである。聖靈の子はついに内外にわたって孤独なる人生の悲劇を免れないのだ。

29 ① ユダ

後代はいつかユダの上にも悪の円光を輝かせてゐる。しかしユダは必しも十二人の弟子たちの中でも特に悪かつた訳ではない。ペテロさへ庭鳥の声を挙げる度に三度クリストを知らないと言つてゐる。ユダのクリストを売つたのはやはり今日の政治家たちの彼等の首領を売ると同じことだつたであらう。②③
 大きい謎に数へてゐる。が、クリストは明らかに誰にでも売られる危機に立つてゐた。祭司の長たちはユダの外にも何人かのユダを数へてゐた筈である。唯ユダはこの道具になるいろいろの条件を具へてゐる④

た。勿論それ等の条件の外に偶然も加はつてゐたことであらう。後代はクリストを「神の子」にした。それは又同時にユダ自身の中に悪魔を発見することになつたのである。しかしユダはクリストを売つた後、白楊の木に縊死してしまつた。彼のクリストの弟子だつたことは——神の声を聞いたものだつたことは或はそこにも見られるかも知れない。ユダは誰よりも彼自身を憎んだ。十字架に懸つたクリストも勿論彼を責めたであらう。しかし彼を利用した祭司の長たちの冷笑もやはり彼を憤らせたであらう。

⑥「お前のしたいことをはたすが善い。」

かう云ふユダに対するクリストの言葉は軽蔑と憐憫とに溢れてゐる。「人の子」、クリストは彼自身の中にも或ユダを感じてゐたかも知れない。しかしユダは不幸にもクリストのアイロニイを理解しなかつた。

(注)

①ユダ Judas Iscariot 十二使徒のひとり。金銭に目がくらみ。銀三十枚でイエスを祭司に売つたという。後に悔悟して縊死。背信の徒として聖書にのせられている。イスカリオテのユダ。

②ペテロさへ庭鳥の……「マタイ伝」第二十六章・六十九―七十五。

③パピニ Giovanni Papini ジョヴァンニ（一八八一―一九五六）イタリアのカトリック作家。「キリスト伝」（二二）は「信仰の否定」と「瀆神」に対する彼の挑戦の書。同書に「ユダの神秘は贖罪の神秘に二重に結いつけられて居り。我々最も小さき者にとっては、一つの神秘として残るだらう」とある。

④いろいろの条件 ユダひとりが十二人の使徒の中で異種族だつたといわれていることもその一つか。

⑤白楊の木 はこやなぎ（和名）。「セイヨウハコヤナギ」の類を総称して「ポプラ」という。「マタイ伝」第二十七章・一―五にはユダが後悔してイエスを売って得た銀三十枚を祭司に返へそうとしたが受け取って貰えず、「その銀を殿に投棄て其処を去ゆきて自ら縊たり」とあるが、白楊の木のことを見えない。

⑥「お前のしたいことを……」 「マタイ伝」二十六章・二十一―二十五の中には単に「……人の子を売す者は禍なる哉その人生れざりしならば反て幸なりしならん彼を売すユダ答て日けるはラビ（わが主）我なるや之に日けるは爾の言る如し」とあつてこの語はない。「ヨハネ伝」第十三章・二十七に「彼が一撮の物を受し其時サタン彼に入り是に於てイエス彼に日けるは爾が為んとする事は速かに為せ」とある。

⑦軽蔑と憐憫 ユダの裏切りに対する解釈は近代作家の間に於てもさまざまで、例えば、モーリヤックは、ユダが愛されていなかった為にクリストを売つたという解釈である（モーリヤック「イエス伝」）が、遠藤周作はひたすらにユダの人間性の弱さにあるという解釈で初期の作品「白い人」（昭・三〇）では女学生「マリー・テレーズ」に後期の代表作「沈黙」では「キチジロー」に托して弱き人間ユダを描き聖書にあるこの言葉は弱き人間の代表者ユダに対する溢れる様な愛の言葉であり、弱者である人間にとっての最高の救いの言葉と解している。

⑧アイロニー 皮肉。諷刺。元来、偽装、仮装、ごまかしの意で転じて真の認識に達するためにソクラテスの用いた問答法をいうが、ここでは言外に含まれているキリストの真意でも解するがよいであらう。

(解)

後代はいつからユダを極悪の象徴にまつり上げている。然しユダは必ずしも十二人の弟子たちの中でも特に悪かったわけではない。「弟子たち仲間で常に代表的立場にあった」ペテロでさえ「キリストの捕縛のとき自分への危険を逃れるため」庭鳥が鳴く前に三度「も」キリストを知らないと言っているのだ。ユダがキリストを裏切ったのはやはり今日の政治家たちが彼らの指導者を裏切ると同じことで「珍らしくないことで」あったであらう。「それなのに」パピニもまたユダの背信行為を大きい謎にあげている。が、キリストは明らかにだれにでも寝返られる危険な場に立っていた。「それゆえ」祭司の長たちはユダのほかにも第二第三のユダを考えていたはずである。ただユダはこの裏切りの道具になるいろいろの条件を具えていた。もちろんそれらの条件のほかにも偶然も加わっていたことであらう。後代はキリストを「神の子」にした。そのことは同時にユダの中に悪魔を発見することになったのである。しかしユダは「そんな悪魔ではなく」クリストを裏切った後、ポプラの木に縊死してしまった。彼がキリストの弟子「らしい弟子」だったことは、——「キリストの」神の聲に接したものだ——ことはあるいはそこ（自殺）にも見られるかも知れない。

ユダはだれ「を憎む」よりも自分自身を憎んだ。「自分ゆえに」十字架に懸ったキリスト「を思うこと」もちろん彼を苦しめたであらう。しかし彼を利用した祭司の長たちの彼への冷笑もやはり彼を憤らせたであらう。

「おまえのしたいことをはたすが善い。」こういうユダに対するキリストの言葉はあなどりとあわれみとに溢れている。「神の子」〔であり、神の子ではない〕キリストは彼自身の中にもあるいはユダに通じるものを感じていたかも知れない。

然しユダは不幸にもキリストのこの言葉に含まれる言外の真意を汲みとれなかった。

(要旨)

本章以後数章はキリスト処刑の周辺に照明を与えることに費やされて、まず本章はキリストを裏切ったユダ問題をとりあげることではじめる。彼はいつからか極悪人の烙印を捺されているが、弟子たちの中で特に悪かったのでもないし、寝返りは今日の政治家にだって珍しいことでもない。キリストは誰にでも売られ易い立場にあったのだから、ユダの裏切りを大きな疑問とするパピニの考えは当たらない。祭司の長たちがまずユダを選んだのは、いろいろな条件と偶然のためからだと考えられる。それなのに後代が彼を極悪人ということにしたのは、キリストを「神の子」に仕立てたのでそれに対して悪魔的人間を仕立てる心理が働いたためである。しかし彼が極悪人どころか、いかにキリストの弟子としてふさわしかったことは自害したこと

も考えられてよからう。すなわち彼は誰よりも自分を憎み、裏切りを後悔し、自分を利用しながら冷笑している祭司の長たちに憤ったのである。ユダの裏切りを予知したクリストのユダへの言葉に軽蔑と憐憫とがこもっているのは、クリスト自身の中に人の子として、それも仕方がないと、理解できるだけの覚えがあつてのせいかも知れない。クリストもユダも共に人の子である以上、そう隔たりがあるはずはないからである。が、ユダはそこまではこの言葉のもつ言外の真意を理解でなかつたのである。

30 ① ピラト

ピラトはクリストの一生には唯偶然に現れたものである。彼は畢に代名詞に過ぎない。後代も亦この官吏に伝説的色彩を与へてゐる。しかしアナトール・フランスだけはかう云ふ色彩に欺かれなかつた。

(注)

①ピラト ユダヤ、サマリヤ、イドマヤを治めた第五代ローマ総督。

イエスを十字架にかけるよう命じた。

②伝説的色彩 「ルカ伝」第十三章・一に「当時あつたりたる者の中にピラトがガリラヤ人の血を其供物に雑し事を……」とあり、ピラトの性格の残忍性を思わせる。又、「ヨハネ伝」第十九章・十二に「此後ピラト彼を釈さんと謀る然どもユダヤ人さげび日けるは若し

これを釈さばカイザルに忠臣ならず凡て自己を王となす者はカイザルに叛く者なり」とあつてピラトがイエスを処刑したのは、ユダヤ人やカイザルの思惑を恐れたという風な劇的な記述になつてゐる。

③アナトール・フランス Anatole France (一八四四—一九二四)
フランスの小説家・批評家。彼の作品に「ユダヤの代官」があつて、イエスを処刑したことを忘れ去つてゐる老年のピラトが描かれてゐる。

(解)

「クリストを処刑した」ピラトはクリストの一生に対してはただ偶然に現れたものである。どう考えても彼は「偶然現れたものを意味する」代名詞にすぎない。「新約聖書のみならず」後代もまたこの官吏にさまざまの伝説的色彩を与へている。しかしアナトール・フランスだけはこういう色彩に欺かれることなく真相を見抜いてゐた。

(要旨)

ピラトはクリストの処刑者として有名で、それだけ新約聖書(注参照)をはじめ、後代も「ピラト行伝」などがあつて、このローマの第五代総督にさまざまの伝説的色彩(残忍苛酷な性格とか、クリストの無罪を認めておりながら処刑したのは、ユダヤ人の強い要求に屈してとか、皇帝の反感を恐れてとか、また彼の最期についても、自殺説、皇帝による斬首説などがある)を与へているが、さすがにアナトール・フランスだけは鋭くもその著「ユダヤの代官」において、ピラトが

クリスト処刑後、年を経て友人と話が当時のことに及んだとき「イエス？ナザレびとのイエス？ 覚えがないなあ」といい放つ場面を書いている。これが真相を伝えるものである。ピラトのクリスト処刑は彼の意識的行為ではなく、たまたまクリスト処刑の命令者の立場にあったために事務的に処理したにすぎない。誰がその立場にあったとしてもその処理は同じでしかなかったのだ。ゆえにピラトはクリスト処刑の場にただ偶然に現われたと見るべきで、そのほかに彼にはいかなる意味づけも色彩づけもほどこすべきではない。単に偶然がピラトをして事務的に、偉大なる天才クリストを処刑させたのである。偶然なるものの人生支配について芥川はすでに「5 エリザベツ」においても深く感じているし、また「侏儒の言葉」「闇中間答」等の中にも記している。理智主義といわれた彼がいかに「偶然」の支配を痛感していたかを知るべきである。

31 クリストよりもバラバを^①

クリストよりもバラバを——それは今日でも同じことである。バラバは叛逆を企てたであらう。同時に又人々を殺したであらう。しかし彼等はおのづから彼の所業を理解してゐる。ニイチエは後代のバラバたちを街頭の犬に比へたりした。彼等は勿論バラバの所業に憎しみや怒りを感じてゐたであらう。が、クリストの所業には、——恐らくは何も感じなかつたであらう。若し何か感じてゐたとすれば、それは彼

等の社会的に感じなければならぬと思つたものである。彼等の精神的奴隸たちは、——肉体だけは逞しい兵卒たちはクリストに荆の冠をかむらせ紫の袍をまとはせた上、「ユダヤの王安かれ」と叫んだりした。クリストの悲劇はかう云ふ喜劇のただ中にあるだけに見じめである。クリストは正に精神的にユダヤの王だつたのに違ひない。が、天才を信じない犬たちは——いや、天才を発見することは手易いと信じている犬たちはユダヤの王の名のもとに真のユダヤの王を嘲つてゐる。^⑥「方伯のいと奇しとするまでにイエス一言も答へせざりき。」——クリストは伝記作者の記した通り、彼等の訊問や嘲笑には何の答へもしなかつたであらう。のみならず何の答へをすることも出来なかつたことは確かである。しかしバラバは頭を挙げて何ごとも明らかに答へたであらう。バラバは唯彼の敵に叛逆してゐる。が、クリストは彼自身に、——彼自身の中のマリヤに叛逆してゐる。それはバラバの叛逆よりも更に根本的な叛逆だつた。同時に又「人間的な、余りに人間的な」叛逆だつた。

(注)

①バラバ 逾越祭の恩赦の慣例行事により、ピラトが釈放した四人。その時のもう一人の囚人だつたイエスは十字架にかけられた。「マタイ伝」第二十七章・二十・二十一に「祭司の長老たちバラバを釈しイエスを殺さんことを求と民に喫む。方伯こたへて彼等に日けるは二人のうち孰を我なんぢらに釈さんことを望むや彼等バラバと答ふ。」とある。他に「マコ伝」第十五章・十一。「ルカ伝」第二

十三章・十八―二十三。又「ヨハネ伝」第十八章・三十九―四十に「愛に爾曹に一の例あり我踰越の節に一人の囚人を爾曹に積す爾曹ユダヤ人の王を積さん事を欲ふや衆人喊叫ひひけるは斯人に非ずバラバを釈せバラバは盜賊なる也」とある。

②ニイチエは後代の……「これをもて彼らは狼を犬となし、人間そのものをも人間のいと善き家畜となしき」(「ツァラトウストラ」)

③荆の冠をかむらせ「マタイ伝」第二十七章・二十八・二十九に「彼の衣をはぎて絳色の袍を着せ棘にて冕を編其首に冠しめ……」、「マコ伝」第十五章・十七に「彼に紫の袍をきせ棘にて冕を編て冠しめたり」、「ヨハネ伝」第十九章・二に「兵卒ども棘にて冕を編かれの首に冠しめ又紫の袍を衣せて」とある。

④ユダヤの王 ルナンの「イエス伝」に「イエス自身では決して称えなかつたのであるが、敵がイエスの役割と主張との要約であるかのように称え立てたところの「ユダヤの王」という称呼は、おのずから、ローマ官憲の疑惑を刺戟するのに一ばんよい口実であった。イエスは、この方面から、反徒とし、国事犯として、咎められはじめたのである」とある。

⑤精神的にユダヤの王 「マタイ伝」第二十七章・十一に「さてイエス方伯の前にたつ、方伯イエスに問て日けるは爾はユダヤの王なるかイエス之に日けるは爾が言る如し」、又「ヨハネ伝」第十八章・三十七に「ピラト彼(イエス)に日けるは然ば爾は王なるかイエス答けるは爾の言ところの如く我は王なり我これが為に生れこれが為に世に臨れり」とある。

⑥方伯のいと奇し…… 「マタイ伝」第二十七章・十四に「方伯のいと奇しとするまでにイエス一言も答せざりき」とある。又、「マコ伝」第十五章・五に「ピラトの奇と為るまでにイエス何をも答ざりき」、「ルカ伝」第二十三章・九には「この故に多くの言を以て問けれどもイエス何をも答ざりき」とある。

⑦人間的な、余りに人間的な ニイチエの著(第一部一八七八、第二部一八七九)の題名。

(解)

〔逾越祭の慣例で囚人が一人ゆるされることになったとき、群衆が〕クリストよりもバラバを(ゆるせと騒いだが)——それは今日でも同じことである。バラバは叛逆を企てたであろう。同時にまた人々を殺したてもあろう。が、しかし彼ら(群衆)は教えられなくても自然と彼(バラバ)が何をしたかが分かっている。ニイチエは後代のバラバの連中を町をうろつく野良犬に比えたりした。群衆たちは勿論バラバの所業に憎しみや怒りを感じていたであろう。ところで(彼らの理解をこえた)クリストの所業には、——おそらくは何も感じなかつたであろう。もし何か感じていたとすれば、それは彼らが世間に調子を合わせるために感じなければならぬと思つたものである。(つまり附和雷同しているだけなのである。)彼ら民衆の精神的奴隸たちは、——肉体だけたくましい兵卒たちはクリストに荆の冠をかむらせ、紫の外套を着せた上、「ユダヤの王万才」と叫んだりした。クリスト処刑の悲劇はこういう(精神的奴隸がそれと知らずに精神的王者をひや

かす」喜劇のただ中行なわれているだけにみじめである。クリストは「兵卒たちが叫んだ通り」まさに精神的にユダヤの王だったのに違いない。が、天才を信じない犬たちは——いや、天才を発見することはたやすいと思いきんでいる犬たちはユダヤの王の名のもとに真のユダヤの王を嘲っているのだ。「つかさ（総督ピラト）が非常に不思議に思ったほどにイエスは「何を聞かれても」一言も答えなかった。」——クリストは伝記作者の記した通り、彼らの訊問や嘲笑には何の答えもしなかったであろう。のみならず何の答えをすることも出来なかったことは確かである。しかしバラバは彼らに向って何事も明らかに答えたであろう。バラバはただ彼の敵に叛逆しているだけだ。が、クリストは彼自身に、——彼自身の中のマリア（守らんとするもの）に叛逆しているのだ。それはバラバの叛逆よりもさらに根本的な叛逆だった。同時にまた「人間的な、あまりに人間的な」叛逆だった。

（要旨）

えたいの知れないクリストよりも、たとい悪者ではあっても正体の分かったバラバの方を助けたいというのは、今日でも変わらない。理解できる所業にはそれなりの感じを持つものだが、クリストの所業は彼らの理解を越えていたから何も感じなかったろう。がもし何か感じたとすれば、それはせいぜい何の見識もない彼らが社会に調子合わせるために感じなければならぬと思っただけである。だから、たくましいのは肉体だけで精神的には奴隷同様の兵卒たちは周囲に支配されて、精神的王者を弄び笑いものにしていい気になっている。目前

にいる天才を信じなくせに自分では天才を見出すことはたやすく出来ると思っている凡俗どもは情ない限りである。天才と凡俗とはこうも隔絶するものか。クリストは訊問に沈黙を通したが答えようもなかったのだ。それというのは、はきはき答えたバラバの叛逆はただ自分の外にいる敵に対してであるが、クリストは自分自身、すなわち彼自身の中の母マリアからうけついでものへの叛逆であるからだ。マリア的なものは、あらゆる男女に共通するもの（第2章）であるから、クリストの叛逆はバラバの叛逆よりも更に人間の根本にかかわる叛逆であり、同時にまた人間なるがゆえの叛逆だったのである。それにもかかわらず、クリストよりもバラバを助けたいというのは今日もお変わらないのだ。社会は依然として天才を理解できないし、そのために叛逆の囚人バラバを理解できるということだけで選ぶしかない状態が続いている。人間は進歩しないのか。天才はついに永遠に孤立のうちに葬られなければならないのか。芥川は天才クリストの悲劇のうちに、現代への諦めるほかない、絶望を覗いているのである。

32 ゴルゴダ

十子架の上のクリストは畢に「人の子に」に外ならなかった。

①「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる？」

勿論英雄崇拜者たちは彼の言葉を冷笑するであらう。況や聖霊の子供たちでないものは唯彼の言葉の中に「自業自得」を見出すだけで

ある。「エリ、エリ、ラマサバクタニ」は事実上クリストの悲鳴に過ぎない。しかし、クリストはこの悲鳴の為に一層我々に近づいたのである。のみならず彼の一生の悲劇を一層現実に教へてくれたのである。

(注)

①わが神、わが神、…… イエスが息をひきとる前に叫んだ言葉。「マタイ伝」第二十七章、四十六に「三時ごろイエス大声にエリ、エリ、ラマサバクタニと呼りぬ之を釈ば吾神わが神なんぞ我を遺たまふ呼と云る也」とある。

この言葉をイエスが愛誦していた詩篇の一節であり、「しかも、詩篇の冒頭の一節を読むことはその詩全体を晶えることを意味していたのが、ユダヤ人の習慣であった」として「実は絶望を歌った詩ではなくて、神への全き信頼と、そこから生まれ出る希望を歌ったものである」とする説がある。(佐古純一郎・旺文社文庫・西方の人巻未解説)その詩篇とは「旧約詩篇第二十二篇」のことで「あけぼのの鹿の調にあはせて伶長にうたはしめたるダビデの歌」として第一節「わが神、わが神なんぞ我をすてたまふや、何なれば遠くはなれて我をすくはず、わが歎きのこゑをきき絵はざるか」に始まり二十八節より終りの三十一節は次の如くなっている。「国はエホバのものなればなり、エホバはもろもろの国人をすべをさめたまふ。／地のこえたるものは皆くらひてエホバををがみ塵にくだるものと己がたましひを存ふる」と能はざるものと皆そのみまへに拝跪かん／たみの裔のうちにエホ

バにつかふる者あらん主のことは代々にかたりつたへらるべし／かれら来りて比はエホバの行為なりとてその義を後にうまるる民にのべつたへん。」

然し芥川は「続西方の人・20 受難」に於て更にここにふれて「彼は「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と云ふ必死の声を挙げた後も(たとひそれは彼の愛する讚美歌の一節だったにせよ)彼の息の絶える前に何かおほ声を発してゐた」と述べている。ルナンの「イエス伝、第二十五章」には「或る物語によると、彼は、一時、氣力を失った。雲が、父の顔をおほうた。彼は、いかなる苦悩よりも幾千倍も鋭い絶望の苦悶に襲はれた。彼は、人間の忘恩をしか見なかつた。彼は、おそらく、卑しい人類のために苦しむことを悔いて叫んだ、「わが神、なにゆゑわれを棄てたまふや」。しかし、彼の神的本能は、ふたたび勝った。体の生命の衰へゆくにつれ、魂は、晴ればれとなり、すこしずつ、その天の源へ戻っていった。」とある。

(解)

十字架の上のクリストはどうみても「人の子」以外の何者でもなかつた。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる?」

もちろん英雄崇拜者たちは「期待が裏切られた思いで」彼のこの言葉を冷笑するであろう。いわんや聖霊の子供たちでない〔俗〕人は彼の言葉の中に「自業自得」を感じるだけである。「エリ、エリ、ラマサバクタニ」は「クリスト教関係者がどう考えようとも」事実上(人

間) クリストの悲鳴にすぎない。しかしクリストはこの悲鳴をあげたために一層我々(人間)に近づいたのである。のみならず彼の一生の悲劇を一層現実的に教えてくれたのである。

(要旨)

十字架上で「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と叫んだクリストは要するに「人の子」だ。自分は何の実銭もせずただ観念的に英雄を崇拜し、それをクリストに期待していた無責任な人々は、これで失望して冷笑するであろうし、聖霊の子でない俗物はそれを夢想家の「自業自得」と思うだけであろう。彼らはいずれもクリストを誤解しているのである。これは実際、クリストの悲鳴とうけとるべきであり、前章で叛逆の点で人間的な面を示した彼は、この悲鳴をあげたため一層、我々に近い存在となったのである。この悲鳴はそれのみか、彼の中の聖霊と彼の中のマリアとの一生にわたる戦いの悲壮さを一層現実において、よく分かるように教えてくれたことになる。

33 ピエタ

クリストの母、年とつたマリアはクリストの死骸の前に歎いてゐる。——かう云ふ図の^①apletと呼ばれるのは必も感傷主義的と言ふことは出来ない。唯ピエタを描かうとする画家たちはマリア一人だけを描か

なければならぬ。

(注)

①aplet ピエタ Pietà 「敬虔な哀悼」を意味するイタリア語。聖母マリアがキリストの死体をひざの上に抱いて嘆き悲しんでいる図または像。十四世紀のドイツに始まるという。

②必も 必しもの誤であるう。

③マリア一人だけを「マタイ伝」第二十七章・五十五・五十六に「比処に遙に望えたる多くの婦ありし、彼等はガラリヤよりイエスに従ひ事し者等なり。其中に居し者はマグダラのマリアとヤコブヨセの母なるマリアとデベダイの子等の母と也」とあり、「マコ伝」第十五章・四十・四十一に「また遙に望むたる婦ありし其中に在し者はマグダラのマリアおよび年少ヤコブとヨセの母なるマリア又サロメなり、彼等はイエスのガラリヤに居たまひし時これに従ひ事し者等なり又この他にも彼と共にエルサレムに上りし多の婦ありき」とあり、「ルカ伝」第二十三章・四十九に「イエスの相識の人々およびガラリヤより随ひし婦ども遠く立て此等の事を見たり」とあって、イエスの母マリアが十字架のそばにいた記述はないがただひとり「ヨハネ伝」第十九章・二十五・二十六・二十七には「さてイエスの母と母の姉妹およびクロパの妻のマリア並マグダラのマリアその十字架の旁に立り、イエス母と愛する所の弟子と旁に立るを見て母に曰けるは婦よ此なんちの子なり。また弟子に曰けるは比なんちの母なり是時その弟子かれを己の家に携往り」とある。

ルナンは「イエス伝・第二十五章」で次の様に述べている。「第四福音書を信するなら、イエスの母マリヤも十字架の下にをり、イエスは、母と愛する弟子との共にゐるのを見て、母に、『見よ、汝の子なり』といひ、弟子に、『見よ、汝の母なり』と言つたといふ。しかし、さうすると、共観福音書の記者たちが、他の女たちの名前を掌げてゐながら、なぜ、そこにゐれば実に著しい特色となるところのこの女性を省いてしまつたか、そのわけが分らなくなる。イエスの至高の性格は、すでに自分のわざに没頭し、も早、人類のためにのみ存在してゐたに他ならないこの瞬間に、そんな尤もらしい個人的感激を示しはしないであらう。イエスは、遠くから彼の目を慰めてくれるこの女たちの小さな群を別とすれば、眼前には、人間の卑しい、あるいは愚かな光景をしか持たなかつた。」と。

すなわちルナンによれば「ヨハネ伝」の記述は「感傷主義的」ということになる。

しかし芥川のこの章の主旨よりすれば十字架の旁に母のマリヤがいたかどうかは問題でなく、ピエタなるものの本質にあるのである。

(解)

クリストの母、年をとつたマリヤはクリストの死骸の前で歎いてゐる。こういう図が *cease* と呼ばれるのを感傷主義的な呼び方だと云うのはあたらない。ただピエタをその題名にふさわしく描こうとする画家たちは「クリストの死骸を除いて」マリヤ一人だけを描かなければならぬ。

(要旨)

年老いた母がわが子の死体に対して歎泣するというのは人情の自然の発露であり、従つて老婦マリヤが処刑されたクリストの死体を前に歎く図がピエタ(敬虔な哀悼)と呼ばれているのを感傷主義的な呼び方だとは云えない。ただこの場合、つぎの配慮が必要だ。クリストのクリストたる所以は父デーモンの血をうけついで人の子である点にあり、「守らんとする」生活者マリヤにとつてクリストは我が子ながら全く理解を絶した「永遠に超えんとする」天才であり、クリストにとつてマリヤは意志的に最後まで叛逆すべき対象の典型であつた。両者は母子であつてもどういふ渾然たる一体となり得ない関係にあるのだから、ピエタを描く画家は母マリヤだけを描くべきであらう。

34 クリストの友だち

クリストは十二人の弟子たちを持つてゐた。が、一人も友だちは持つてゐた。若し一人でも持つてゐたとすれば、それはアリマタヤのヨセフである。②「日暮るる時尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云へる者来れり。この人は神の国を望めるものなり。彼ははからずピラトに往きてイエスの屍を乞ひたり。」——マタイよりも古いと伝えられるマコは彼のクリストの伝記の中にかう云ふ意味の深い一節を残した。この一節はクリストの弟子たちを「これに従ひつかへしものどもなり」と云ふ言葉と全然趣を異にしている。ヨセフは恐らくはクリス

トよりも更に世間智に富んだクリストだつたであらう。彼は「はばからずピラトに往きイエスの屍を乞」つたことはクリストに対する彼の同情のどの位深かつたかを示してゐる。教養を積んだ議員のヨセフはこの時には卒直そのものだつた。後代はピラトやユダよりもはるかに彼には冷淡である。しかし彼は十二人の弟子たちよりも或は彼を知つてゐたであらう。ヨハネの首を皿にのせたものは残酷にも美しいサロメである。が、クリストは命を終つた後、彼を葬る人々のうちにアリマタヤのヨセフを数へてゐた。彼はそこにヨハネよりもまだしも幸福を見出してゐる。ヨセフも亦議員にならなかつたとしたらば、——それはあらゆる「若し……ならば」のやうに畢意問はないでも善いと④かも知れない。けれども彼は無花果の下や象嵌をした杯の前に時々彼の友だちのクリストを思い出してゐたことであらう。

(注)

①アリマタヤのヨセフ サンヒドリンの議員「マタイ伝」第二十七章・五十七に「日かれてイエスの弟子なるヨセフと云るアリマタヤの富人きたりてピラトに往きイエスの屍を請しかば」とある。

②日暮るる時…… 「マコ伝」第十五章・四十三。

③ヨハネの首を…… ワイルドの戯曲「サロメ」(一八九三)の主人公。「マタイ伝」第十四章。「マコ伝」第六章。などより取材。ワイルドの作品ではこのパプテスマのヨハネはヨカナンとして登場する。

④善いこと 善いこと、の誤りであらう。

⑤象嵌 金属・陶磁器・牙・木材などに、模様などを刻み込んで、そこに金、銀その他の材料をはめこむこと。また、そのはめ込んだもの。

(解)

クリストは十二人の弟子たちを持っていた。が、一人も友だちは持たずにいた。もし一人でも持っていたとすれば、それはアリマタヤのヨセフである。「日暮れるとき地位の高い議員アリマタヤのヨセフという者(ピラトのもとに)来れり。この人は神の国を待ち望んでいる人であった。彼は大胆にもピラトに行つてイエスの屍の引取り方を願つた。」——マタイよりも古いと伝えられるマコは彼のクリストの伝記の中にこういう意味の深い一節を残した。この一節はクリストの弟子たちを「これ(クリスト)に従いつかえしものどもなり」という(簡単な)言葉とは全然趣を異にしている。ヨセフは恐らくはクリストよりもさらに世才にたけたクリスト(超えんとするもの)だったであらう。彼が「はばからずピラトに往きイエスの屍を乞」つたことはクリストに対する彼の同情がどのくらい深かつたかを示している。教養の深い議員のヨセフではあったがこのとき(「だけ」)は卒直そのものだった。(「それなのに」)後代はピラトやユダに対するよりもはるかに彼に冷淡である。しかし「これは正しくない」ヨセフは十二人の弟子たちよりもあるいはクリストを理解してゐたであらう。「といふのは次④のことが考えられるからである。」(「パプテスマの」)ヨハネは残酷にも美しいサロメによって首を皿にのせられた。が、クリストは自分の

死後、葬ってくれる人々のうちにアリマタヤのヨセフを数え（彼に期待し）ていた。クリストはその点ヨハネよりもまだしも幸福を見出している（といえるし、ヨセフの行動は、クリストのその心中を理解してのものと考えられよう。）（「ところで」ヨセフにしても議員になっていなかったとしたならば——それはあらゆる「もし……ならば」のように結局問題にしなくても善いことかもしれない。けれども「議員でなかったら」彼は無花果の下や象撤した杯の前でときどき「亡き」友だちのクリストを思い出して「るしかできなかった」たであろう。

（要旨）

聖書に従えば、クリストは友だちを一人も持っていない。しかし若し一人でも考えたとすればマコ伝によってアリマタヤのヨセフのことが考えられる。まず彼もクリストと同じく神の国を待ち望んでいる。これはクリストの同志ともいえようし、また大且にピラトにクリストの死体の引渡しを乞ったのはクリストがヨセフに寄せていた期待を理解しその信頼にこたえたものといえよう。こういうヨセフはまさにクリストの友だちと呼ぶに価しよう。かくして芥川はヨセフに於てクリストの友だちを見出す。が、同時に芥川はクリストとヨセフ、即ち「クリストよりも更に世間智に富んだクリスト」ヨセフとの、友情という点で、クリストの人間同志の友情も畢竟^{じつぎょう}相対的なものにすぎないことを次のように考える。ヨセフのクリストへの友情も彼が議員という社会的地位にあってはじめて發揮できたことではないか。これなくしては天才間の友情も空しく終わるしかなかったのだ。ヨセフに自分を

葬ってくれることを期待したクリストはやはり相対的な人の子であったことを思い、人の子である限り、絶対を志向する天才も究極的には相対的な関係の上に成立する幸福を願わずにいられないものだということを芥川はしみじみかみしめているのである。

短大文学科 教授